

「沖縄県民投票」

2019年02月26日

米軍の普天間飛行場（宜野湾市）の移設に伴う名護市辺野古の新基地建設を巡る沖縄県民投票が24日（日）に行われた。投票率は52.48%で、「埋め立て」に「賛成」が114,933票（19.1%）、「反対」が434,591票（72.2%）、「どちらでもない」が52,682票（8.8%）であった。「反対」は、有権者総数1,153,591人の4分1（28.8万票）をはるかに上回った。昨年9月の県知事選での玉城デニー氏の獲得数39.66万票を4万票近く上回る結果であった。出口調査では、自民党支持者で「賛成」が40.6%に対し、「反対」が48.0%、公明党支持者で「賛成」が25.8%に対し、「反対」が54.8%となり、支持政党とは関係ない県民の意志が表されたと見ることができる。私は、投票率が低くなるのではないかと危惧していたが、沖縄県民は過酷な戦争体験から、平和を求める「心」を強く表した。玉城知事は、安倍政権と米国政権に投票結果を知らせ、辺野古新基地建設を変更するように訴えると言っている。この投票結果を踏まえ、沖縄県民に敬意を払いつつ、本土も自分の問題として、沖縄県民の「心」を強力に後押しすべきである。

仲井眞弘多元県知事は辺野古新基地反対を公約にして当選したにもかかわらず、2013年に「埋め立て」を承認した。政府は、承認を得たことを理由に「埋め立て」工事を進めた。しかし、その後の2回の県知事選挙において、新基地「反対」を訴えた翁長雄志前知事、玉城デニー現知事を選出した。オール沖縄の力を結集して、「反対」の意志を明らかに表明した訳である。ところが政府は、「世界一危険」な普天間基地を除去するためには、辺野古新基地建設しかない、と沖縄県民だけでなく、多くの国民の反対を押し切って、強引に「埋め立て」工事を進めている。テレビで、土砂が投入されていく工事の進捗状況を見て、胸が痛む。政府は、辺野古新基地建設は国家の安全保障上、必要であると言うが、住民がこれだけ反対するのを抑え込んだの安全保障とは何かと問いたい。国民が安全に暮らせることが、安全保障の第一歩である。民意を払いのけ、自治権を抑え込み、権力で強引に進めることは民主主義に反する。

妻の妹の久保礼子牧師は沖縄の「よきサマリア人伝道所」に仕え、隣接している病院のチャプレンを兼任している。同人誌『時の徴』に毎回「ちゅら礼子通信」を連載し、153号に「追い詰められているのは、どっち?!」を寄稿し、下記のように書いている。「それでも、沖縄の方々が諦めてしまうどころか、益々粘り強く『ヤマト』と『世界』に平和を発信し続けていることに励まされます。その粘り強い取り組みは『沖縄を犠牲にして良い』という従来の『ヤマト』の在り方を問い続け、確実に変えています。『ヤマト』の安倍政権は、数に頼った強気の姿勢をとっていますが、実際にはその姿勢がどんなに理不尽で正義のないものであるか、『民主主義』を破壊するものであるかをやればやるほど明らかに示しています。『ヤマト』ではそのことへの反発が若者の間に広がっています。中には『基地を本土で引き受けよう』と運動している人たちもいます。詰められているのは、沖縄ではなく、『ヤマト』であり、『安倍政権』の方だと思えます。」

久保牧師の言うように、本土の私たちが辺野古新基地問題を問われ、そして「安倍政権」が沖縄から追い詰められているのが現状である。日本列島の形は「ワニ」に例えられる。ワニは尾っぽに強力な力を持っている。沖縄の尾っぽの力によって、本土が目覚め、民主主義、人権、平和的生存権を確立していく。他国軍が住民を無視して駐留することは真の独立国でないと認識すべきだと、私は常々思っている。